

湖南の扇

芥川龍之介

青空文庫

広東かんとうに生れた孫逸仙そんいつせん等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黄興こうこう、蔡鍔さいがく、
 宋教仁そうきやうじん等はいずれも湖南こなんに生れてゐる。これは勿論もちろん曾國藩そうこくはんや張之洞ちやうしどうの感化にも
 よつたのであろう。しかしその感化を説明する為にはやはり湖南の民自身の負けぬ氣の強
 いことも考えなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小説しもじみた下の小事
 件に遭遇した。この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことにな
 るのかも知れない。……………

* * * *

大正十年五月十六日の午後四時頃、僕の乗つていた沅江丸げんかうまるは長沙ちやうさの棧橋へ横着けに
 なつた。

僕はその何分か前に甲板の欄干らんかんへ凭りかかつたまま、だんだん左舷さげんへ迫つて来る湖南
 の府城を眺めていた。高い曇天の山の前に白壁や瓦屋根かわらやねを積み上げた長沙は予想以上に
 見すばらしかった。殊に狭苦しい埠頭ふとうのあたりは新しい赤煉瓦あかれんがの西洋家屋や葉柳はやなぎなど

も見えるだけに殆ど飯田河岸と変らなかつた。僕は当時長江に沿うた大抵の都会に幻滅していたから、長沙にも勿論豚の外に見るものないことを覚悟していた。しかしこう言う見すばらしさはやはり僕には失望に近い感情を与えたのに違いなかつた。

沅江丸は運命に従うようにじりじり棧橋へ近づいて行つた。同時に又蒼い湘江の水もじりじり幅を縮めて行つた。すると薄汚い支那人が一人、提籃か何かをぶら下げたなり、突然僕の目の下からひらりと棧橋へ飛び移つた。それは実際人間よりも、蝗に近い早業だつた。が、あつと思ううちに今度は天秤棒を横たえたのが見事に又水を跳り越えた。続いて二人、五人、八人、——見る見る僕の目の下はのべつに棧橋へ飛び移る無数の支那人に埋まつてしまつた。と思うと船はいつの間にかもう赤煉瓦の西洋家屋や葉柳などの並んだ前にどつしりと横着けに聳えていた。

僕はやつと欄干を離れ、同じ「社」のBさんを物色し出した。長沙に六年もいるBさんはきょうも特に沅江丸へ出迎いに來てくれる筈になつていた。が、Bさんらしい姿は容易に僕には見つからなかつた。のみならず舷梯を上下するのは老若の支那人ばかりだつた。彼等は互に押し合いへし合い、口々に何か騒いでいた。殊に一人の老紳士などは舷梯を下りざまにふり返りながら、後にいる苦力を擲つたりしていた。それは長江を遡つて來た

僕には決して珍しい見ものではなかった。けれども亦格別見慣れたことを長江に感謝したい見ものでもなかった。

僕はだんだん苛^{いらだ}立たしさを感じ、もう一度欄干によりかかりながら、やはり人波の去来する埠頭の前後を眺めまわした。そこには肝腎のBさんは勿論、日本人は一人も見当らなかった。しかし僕は棧橋の向うに、——枝のつまった葉柳の下に一人の支那美人を発見した。彼女は水色の夏衣裳^{なつしやう}の胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だった。僕の目は或はそれだけでも彼女に惹^ひかれたかも知れなかった。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰^{たれ}かに合い図でもするように半開きの扇をかざしていた。……

「おい、君。」

僕は驚いてふり返った。僕の後ろにはいつの間にか鼠^{ねずみ}色の^{いろ}大掛児^{タアクアル}を着た支那人が一人、顔中に愛^{あい}嬌^{きよう}を漲^{みなぎ}らせていた。僕はちよつとこの支那人の誰であるかがわからなかった。けれども忽ち彼の顔に、——就^{なかんずく}中^な彼の薄い眉毛^{まゆげ}に旧友の一人を思い出した。

「やあ、君か。そうそう、君は湖南の産^{うまれ}だったつけね。」

「うん、ここに開業している。」

譚永年^{たんえいねん}は僕と同期に一高から東大の医科へはいった留学生中の才人だった。

「きようは誰かの出迎いかい？」

「うん、誰かの、——誰だと思う？」

「僕の出迎いやないだろう？」

譚はちよつと口をすぼめ、ひよつとこに近い笑い顔をした。

「ところが君の出迎いなんだよ。Bさんは生憎^{あいにく}五六日前からマラリア熱に罹^{かか}っている。」

「じゃBさんに頼まれたんだね？」

「頼まれないでも来るつもりだった。」

僕は彼の昔から愛想の好いのを思い出した。譚は僕等の寄宿舎生活中、誰にも悪感^{あくかん}を与えたことはなかった。若し^も又多少でも僕等の間に不評判になつていたとすれば、それはやはり同室だった菊池寛の言つたように余りに誰にもこれと言うほどの悪感を与えていないことだった。……

「だが君の厄介になるのは気の毒だな。僕は実は宿のこともBさんに任^まかせつきりになつてゐるんだが、……」

「宿は日本人倶楽部^{くらぶ}に話してある。半月でも一月でも差支えない。」

「一月でも？ 常談言っちゃいけない。僕は三晩泊めて貰えりや好いんだ。」

譚は驚いたと言うよりも急に愛嬌のない顔になった。

「たった三晩しか泊らないのか？」

「さあ、土匪どひの斬罪ざんざいか何か見物でも出来りや格別だが、……」

僕はこう答えながら、内心長沙の人譚永年の顔をしかめるのを予想していた。しかし彼はもう一度愛想の好い顔に返ったぎり、少しもこだわらずに返事をした。

「じゃもう一週間前に来りや好いのに。あすこに少し空き地が見えるね。——」

それは赤煉瓦の西洋家屋の前、——丁度あの枝のつまった葉柳のある処に当たっていた。が、さっきの支那美人はいつかもうそこには見えなくなっていた。

「あすこでこの間五人ばかり一時に首を斬きられたんだがね。そら、あの犬の歩いている処で、……」

「そりや惜しいことをしたな。」

「斬罪だけは日本じや見る訣わけに行かない。」

譚は大声に笑った後、ちよつと真面目まじめになったと思うと、無造作に話頭わとうを一転した。

「じゃそろそろ出かけようか？ 車ももうあすこに待たせてあるんだ。」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

僕は翌々十八日の午後、折角の譚の勧めに従い、湘江を隔てた嶽麓^{がくろく}へ麓山寺^{ろくさんじ}や愛晚亭を見物に出かけた。

僕等に乗せたモオタア・ボオトは在留日本人の「中の島」と呼ぶ三角洲^{さんかくす}を左にしながら、二時前後の湘江を走って行った。からりと晴れ上った五月の天気は兩岸の風景を鮮かにしていた。僕等の右に連つた長沙も白壁や瓦屋根の光っているだけにきのうほど憂鬱^{ゆううつ}には見えなかった。まして柑類^{かんるい}の木の茂つた、石垣の長い三角洲はところどころに小ぢんまりした西洋家屋を覗^{のぞ}かせたり、その又西洋家屋の間に綱に吊つた洗濯ものを閃^{ひらめ}かせたり、如何にも活き活きと横たわっていた。

譚^{たん}は若い船頭に命令を与える必要上、ボオトの艙^{へさき}に陣どっていた。が、命令を与えるよりものべつに僕に話しかけていた。

「あれが日本領事館だ。……………このオペラ・グラスを使い給え。……………その右にあるのは日清汽船会社。」

僕は葉巻を銜くわえたまま、舟ばたの外へ片手を下ろし、時々僕の指先に当る湘江しょうこうの水勢を楽しんでいた。譚の言葉は僕の耳に唯一ただつづりの騒音だった。しかし彼の指さす通り、兩岸の風景へ目をやるのは勿論もちろん僕にも不快ではなかった。

「この三角洲さんかくすは橘洲きつしゅうと言つてね。……」

「ああ、鳶とびが鳴いている。」

「鳶が？……うん、鳶も沢山いる。そら、いつか張継堯ちやうけいぎやうと譚延闓たんえんがいとの戦争があった時だね、あの時にや張の部下の死骸しがいがいくつもこの川へ流れて来たもんだ。すると又鳶が一人の死骸へ二羽も三羽も下りて来てね……」

丁度譚のこう言いかけた時、僕等の乗っていたモオタア・ボオトはやはり一艘そうのモオタア・ボオトと五六間隔ててすれ違った。それは支那服の青年の外にも見事に粧よそおった支那美人を二三人乗せたボオトだった。僕はこれ等の支那美人よりも寧ろむしそのボオトの大迂おおすべりに浪なみを越えるのを見守っていた。けれども譚は話半ばに彼等の姿を見るが早いか、殆どほとにでも遇あつたように倉皇そうこうと僕にオペラ・グラスを渡した。

「あの女を見給え。あの艦へんに坐すわっている女を。」

僕は誰にでも急せつつかれると、一層何かとこだわり易い親譲りの片意地を持合せていた。

のみならずそのボオトの残した浪はこちらの舟ばたを洗いながら、僕の手をカフスまでずぶ濡れにしていた。

「なぜ？」

「まあ、なぜでも好いから、あの女を見給え。」

「美人かい？」

「ああ、美人だ。美人だ。」

彼等に乗せたモオタア・ボオトはいつかもう十間ほど離れていた。僕はやつと体をまげ、オペラ・グラスの度を調節した。同時に又突然向うのボオトのぐいと後ずさりをする錯覚を感じた。「あの女」は円い風景の中にちよつと顔を横にしたまま、誰かの話を聞いていると見え、時々微笑を洩らしていた。颯の四角い彼女の顔は唯目の大きいと言う以外に格別美しいとは思われなかった。が、彼女の前髪や薄い黄色の夏衣裳の川風に波を打っているのは遠目にも綺麗に違いなかった。

「見えたか？」

「うん、睫毛まで見える。しかしあんまり美人じゃないな。」

僕は何か得意らしい譚ともう一度顔を向い合せた。

「あの女がどうかしたのかい？」

譚はふだんのおしやべりにも似ず、悠々と巻煙草まきたばこに火をつけてから、あべこべに僕に問い返した。

「きのう僕はそう言ったね、——あの棧橋の前の空き地で五人ばかり土匪どひの首を斬きったつて？」

「うん、それは覚えている。」

「その仲間の頭目は黄六一こうと言つてね。——ああ、そいつも斬られたんだ。——これが又右の手には小銃を持ち、左の手にはピストルを持つて一時に二人射殺こなんすと言う、湖南でも評判の悪党だったんだがね。……」

譚は忽ち黄六一の一生の悪業を話し出した。彼の話は大部分新聞記事の受け売りらしかった。しかし幸い血にの匀おひよりもロマンティックな色彩に富んだものだった。黄の平生密輸入者たちに黄老爺こうろうやと呼ばれていた話、又湘譚しやうたんの或商あきんど人から三千元を強奪した話、又腿ももに弾丸を受けた樊阿七はんあしちと言う副頭目を肩に蘆林譚ろりんたんを泳ぎ越した話、又岳州がくしゅうの或山道に十二人の歩兵を射倒した話、——譚は殆ど黄六一を崇拜しているのかと思う位、熱心にそんなことを話しつつけた。

「何しろ君、そいつは殺人^{りよじん} 人百十七件と言うんだからね。」

彼は時々話の合い間にこう言う註釈も加えたりした。僕も勿論僕自身に何の損害も受けない限り、決して土匪は嫌いではなかった。が、いずれも大差のない武勇談ばかり聞かせられるのには多少の退屈を感じ出した。

「そこであの女はどうしたんだね？」

譚はやつとにやにやしなから、内心僕の予想したのと余り変らない返事をした。

「あの女は黄の情婦だったんだよ。」

僕は彼の註文通り、驚嘆する訣^{わけ}には行かなかった。けれども浮かない顔をしたまま、葉巻を銜えているのも気の毒だった。

「ふん、土匪も洒落^{しや}れたもんだね。」

「何、黄などは知れたものさ。何しろ前清^{ぼつねん}の末年^{ごうとうさい}にいた強盜蔡などと言うやつは月収一万元を越していたんだからね。こいつは上^{シャンハイ}海の租界の外に堂々たる洋館を構えているもんだ。細君^{めかけ}は勿論、妾^{めかけ}までも、……………」

「じゃあの女は芸者か何かかい？」

「うん、玉^{ぎよくらん}蘭^{らん}と言う芸者でね、あれでも黄の生きていた時には中々幅を利かしていた

もんだよ。……………」

譚は何か思い出したように少時^{しばらく}口を噤^{つぐ}んだまま、薄笑いばかり浮かべていた。が、やがて巻煙草を投げると、真面目^{まじめ}にこう言う相談をしかけた。

「嶽麓^{がくろく}には湘南工業学校と言う学校も一つあるんだがね、そいつをまっ先に参観しようじゃないか？」

「うん、見ても差支えない。」

僕は煮え切らない返事をした。それはついきのうの朝、或女学校を参観に出かけ、存外^{はずけ}烈しい排日的空氣に不快を感じていた為だった。しかし僕等を乗せたボートは僕の氣もちなどには頓着^{とんちやく}せず、「中の島」の鼻を大まわりに不相変^{あいかわらず}晴れやかな水の上をまっ直^{すぐ}に嶽麓へ近づいて行つた。……………」

* * * *

僕はやはり同じ日の晩、或妓館^{ぎかん}の梯子段^{はしこだん}を譚と一しよに上つて行つた。

僕等の通つた二階の部屋は中央に据えたテーブルは勿論、椅子^{いす}も、唾壺^{たんづぼ}も、衣裳^{いしょうだん}箆

筥^すも、上海や漢^{かん}口の妓館にあるのと殆ど^{ほとん}変りは見えなかった。が、この部屋の天井の隅には針金細工の鳥籠^{とりかご}が一つ、硝子窓^{がらすまど}の側にぶら下げてあった。その又籠の中には栗鼠^すが二匹、全然何の音も立てずに止まり木を上ったり下ったりしていた。それは窓や戸口に下げた、赤い更紗^{さらさ}の布と一しよに珍しい見ものに違いなかった。しかし少くとも僕の中には気味の悪い見ものにも違いなかった。

この部屋に僕等を迎えたのは小肥^{こふと}りに肥った鵝婦^{ポオブウ}だった。譚は彼女を見るが早いか、雄弁に何か話し出した。彼女も愛嬌^{あいきよう}そのもののように滑かに彼と応対していた。が、彼等の話している言葉は一言も僕にはわからなかった。（これは勿論僕自身の支那語に通じていない為である。しかし元来長沙^{ちやうさ}の言葉は北京官話に通じている耳にも決して容易にはわからないらしい。）

譚は鵝婦と話した後、大きい紅木^{こうぼく}のテエブルへ僕と差向いに腰を下ろした。それから彼女の運んで来た活版刷の局票の上へ芸者の名前を書きはじめた。張湘娥^{ちやうしやうが}、王巧雲^{おうこううん}、含芳^{かんほう}、酔玉楼^{すいぎよくろう}、愛媛々^{あいえんえん}、——それ等はいずれも旅行者の僕には支那小説の女主人公にふさわしい名前ばかりだった。

「玉蘭も呼ぼうか？」

僕は返事をしたいにしろ、生憎あいにく鴛婦の火を擦ってくれる巻煙草の一本を吸いつけていた。が、譚はテエブル越しにちよつと僕の顔を見たぎり、無頓着に筆を揮ふるつたらしかった。

そこへ潤達かつたつにはいつて来たのは細い金縁の眼鏡をかけた、血色の好い円顔の芸者だった。彼女は白い夏衣裳なつしやうにダイアモンドを幾つも輝かせていた。のみならずテニスか水泳かの選手らしい体格も具そなえていた。僕はこう言う彼女の姿に美醜や好悪を感じるよりも妙に痛切な矛盾を感じた。彼女は實際この部屋の空気と、——殊に鳥籠とりかごの中の栗鼠りすとは吊つり合わない存在に違いなかった。

彼女はちよつと目礼したがり、躍おどるように譚たんの側へ歩み寄った。しかも彼の隣に坐すわると、片手を彼の膝ひざの上に置き、宛囀えんてんと何かしゃべり出した。譚も、——譚は勿論得意もちろんそうに是了是了などと答えていた。

「これはこの家うちにいる芸者げいしやでね、林大嬌りんたいきやうと言う人だよ。」

僕は譚にこう言われた時、おのずから彼の長沙ちやうさにも少ない金持の子だったのを思い出した。

それから十分ばかりたつた後、僕等はやはり向い合つたまま、木の子だの鶏だの白菜だ

のの多い四川料理しせんりょうりの晩飯をはじめていた。芸者はもう林大嬌の外にも大勢僕等を取り巻いていた。のみならず彼等の後ろには鳥打帽子などをかぶった男も五六人胡弓こきゅうを構えていた。芸者は時々坐すわつたなり、丁度胡弓の音に吊られるように甲高い唄うたをうたい出した。それは僕にも必ずしも全然面白味のないものではなかった。しかし僕は京調けいちようの党馬や西皮調せいひちようの汾河湾ふんかわんよりも僕の左に坐つた芸者に遥はるかに興味を感じていた。

僕の左に坐つたのは僕のおととい沉江丸げんこうまるの上から僅わずかに一瞥いちべつした支那美人だった。彼女は水色の夏衣裳の胸に不あいか相変わらずメダルをぶら下げていた。が、間近に來たのを見ると、たとい病的な弱々しさはあつても、存外ういういしい処はなかった。僕は彼女の横顔を見ながら、いつか日かげの土に育つた、小さい球根を考えたりしていた。

「おい、君の隣に坐っているのはね、——」

譚は老酒ラオチュに赤らんだ顔に人懷ひとなつこい微笑を浮かべたまま、蝦えびを盛り上げた皿越しに突然僕へ声をかけた。

「それは含芳と言う人だよ」

僕は譚の顔を見ると、なぜか彼にはおとといのことを打ち明ける心もちを失ってしまった。

「この人の言葉は綺麗だね。Rの音などは仏蘭西人のようだ。」

「うん、その人は北京生れだから。」

僕等の話題になったことは含芳自身にもわかつたらしかった。彼女は現に僕の顔へ時々素早い目をやりながら、早口に譚と問答をし出した。けれども唾に交らない僕はこの時もやはりいつもの通り、唯二人の顔色を見比べているより外はなかった。

「君はいつ長沙へ来たと尋くからね、おととい来たばかりだと返事をする、その人もおとといは誰かの出迎いに埠頭まで行つたと言っているんだ。」

譚はこう言う通訳をした後、もう一度含芳へ話しかけた。が、彼女は頬笑んだきり、子供のようにいやいやをしていた。

「ふん、どうしても白状しない。誰の出迎に行つたと尋いているんだが。……」

すると突然林大嬌は持つていた巻煙草に含芳を指さし、嘲るように何か言い放つた。

含芳は確かにはつとしたと見え、いきなり僕の膝を抑えるようにした。しかしやと微笑したと思うと、すぐに又一こと言い返した。僕は勿論この芝居に、——或はこの芝居のかげになった、存外深いらしい彼等の敵意に好奇心を感じずにはいられなかった。

「おい、何と言つたんだい？」

「その人は誰の出迎いでない、お母さんの出迎いに行つたんだと言うんだ。何、今ここにいる先生がね、×××と言う長沙の役者の出迎いか何かだろうと言つたもんだから。」
 (僕は生憎その名前だけはノオトにとる訣に行かなかつた。)

「お母さん？」

「お母さんと言うのは義理のお母さんだよ。つまりその人だの玉蘭だのを抱えている家の鵲婦のことだね。」

譚は僕の間を片づけると、老酒を一杯煽つてから、急に滔々と弁じ出した。それは僕には這箇這箇の外には一こともわからない話だつた。が、芸者や鵲婦などの熱心に聞いているだけでも、何か興味のあることらしかつた。のみならず時々僕の顔へ彼等の目をやる所を見ると、少くとも幾分かは僕自身にも關係を持ったことらしかつた。僕は人目には平然と巻煙草を銜えていたものの、だんだん苛立たしさを感じはじめた。

「莫迦！ 何を話しているんだ？」

「何、きよう嶽麓へ出かける途中、玉蘭に遇つたことを話しているんだ。それから……」
 譚は上唇を嘗めながら、前よりも上機嫌につけ加えた。

「それから君は斬罪と言うものを見たがっていることを話しているんだ。」

「何だ、つまらない。」

僕はこう言う説明を聞いても、未だに顔を見せない玉蘭は勿論、彼女の友だちの含芳にも格別気の毒とは思わなかった。けれども含芳の顔を見た時、理智的には彼女の心もちを可也はつきりと了解した。彼女は耳環を震わせながら、テエブルのかげになった膝の上にハンケチを手巾を結んだり解いたりしていた。

「じゃこれもつまらないか？」

譚は後にいた鵜婦の手から小さい紙包みを一つ受け取り、得々とそれをひろげだした。その又紙の中には煎餅位大きい、チョコレートの色に干からびた、妙なものが一枚包んであった。

「何だ、それは？」

「これか？ これは唯のビスケットだがね。……：そら、さつき黄六一と云う土匪の頭目の話をしよう？ あの黄の首の血をしみこませてあるんだ。これこそ日本じゃ見ることは出来ない。」

「そんなものを又何にするんだ？」

「何にするもんか？ 食うだけだよ。この辺じゃ未だにこれを食べば、無病息災になると

思っているんだ。」

譚は晴れ晴れと微笑したまま、丁度この時テエブルを離れた二三人の芸者に挨拶^{あいさつ}した。が、含芳の立ちかかるのを見ると、殆ど憐^{ほとん}みを乞うように何か笑ったりしやべったりしたのみならずしまいには片手を挙げ、正面の僕を指さしたりした。含芳はちよつとためらつた後、もう一度やつと微笑を浮かべ、テエブルの前に腰を下した。僕は大いに可愛^{かわい}かつたから、一座の人目に触れないようにそつと彼女の手を握っていてやった。

「こんな迷信こそ国辱だね。僕などは医者と言う職業上、ずいぶんやかましくも言っているんだが……」

「それは斬罪があるからだけさ。脳味噌^{のうみそ}の黒焼きなどは日本でも嚙^のんでいる。」

「まさか。」

「いや、まさかじゃない。僕も嚙^{もつと}んだ。尤も子供のうちだったが。……」

僕はこう言う話の中に玉蘭^{うち}の来たのに気づいていた。彼女は鴉婦と立ち話をした後、含芳の隣に腰を下ろした。

譚は玉蘭の来たのを見ると、又僕をそつちのけに彼女に愛嬌^{あいぎよう}をふりまき出した。彼女は外光に眺めるよりも幾分かは美しいのに違いなかった。少くとも彼女の笑う度にエナ

メルのように齒の光るのは見事だったのに違いなかった。しかし僕はその齒並みにおのずから栗鼠を思い出した。栗鼠は今でも不相変、赤い更紗さらきの布きれを下さげた硝子窓ガラスまどに近い鳥籠の中に二匹とも滑らかに上下していた。

「じゃ一つこれをどうだ？」

譚はビスケットを折って見せた。ビスケットは折り口も同じ色だった。

「莫迦を言え。」

僕は勿論首を振った。譚は大声に笑ってから、今度は隣の林大嬌へビスケットの一片を勧めようとした。林大嬌はちよつと顔をしかめ、斜めに彼の手を押し戻した。彼は同じ常談ようだんを何人かの芸者と繰り返した。が、そのうちにいつの間にか、やはり愛想の好い顔をしたまま、身動きもしない玉蘭ぎよくらんの前へ褐色の一片を突きつけていた。

僕はちよつとそのビスケットの匂においだけ嗅かいで見たい誘惑を感じた。

「おい、僕にもそれを見せてくれ。」

「うん、こつちにまだ半分ある。」

譚は殆ど左利きのように残りの一片を投げてよこした。僕は小皿や箸はしの間からその一片を拾い上げた。けれども折角拾い上げると、急に嗅いで見る気もなくなったから、黙って

テエブルの下へ落してしまった。

すると玉蘭は譚の顔を見つめ、二こと三こと問答をした。それからビスケットを受け取った後、彼女を見守った一座を相手に早口に何かしゃべり出した。

「どうだ、通訳しようか？」

譚はテエブルに頬杖ほおづえをつき、そろそろ呂律ろれつの怪しい舌にこう僕へ話しかけた。

「うん、通訳してくれ。」

「好いか？ 逐語訳だよ。わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺こうろうやの血を味わいます。……」

僕は体の震えるのを感じた。それは僕の膝ひざを抑えた含芳がんほうの手の震えるのだった。

「あなたがたもどうかわたしのように、……あなたがたの愛する人を、……」

玉蘭は譚の言葉の中うちにいつかもう美しい齒にビスケットの一片を噛かみはじめていた。：

……

* * * *

僕は三泊の予定通り、五月十九日の午後五時頃、前と同じ沅江丸げんこうまるの甲板らんかんの欄干らんかんによ
りかかっていた。白壁や瓦屋根かわらやねを積み上げた長沙ちょうさは何か僕には無気味だった。それは
次第に迫って来る暮色の影響に違いなかった。僕は葉巻を銜くわえたまま、何度もあの愛あい
嬌うの好い譚永年の顔を思い出した。が、譚は何の為か、僕の見送りには立たなかった。

沅江丸の長沙を発したのは確か七時か七時半だった。僕は食事をすませた後、薄暗い船
室の電灯もとの下に僕の滞在費を計算し出した。僕の目の前には扇が一本、二尺に足りない机
の外へ桃色の流蘇ふさを垂らしていた。この扇は僕のここへ来る前に誰かたれの置き忘れて行つた
ものだった。僕は鉛筆を動かしながら、時々又譚の顔を思い出した。彼の玉蘭を苦しめた
理由ははつきりとは僕にもわからなかった。しかし僕の滞在費は——僕は未だいまに覚えてい
る、日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だった。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「中央公論 第四十一年第一号」

1926（大正15）年1月1日発行

入力：j.utyama

校正：柳沢成雄

1998年10月20日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湖南の扇

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>